書儈贅筆

加
743
3上

加賀文庫

宮内省圖書寮

宝墨待訪録二卷 礼員外郎米芾元章撰記 集年
時故所藏晉唐遺跡
其云王氏書畫苑所收宝章待訪録則後人以墨字
作誤章字矣
日書日玉燭宝典十二卷隋著作郎博陵杜臺卿大
山撰以月令為主觸類而廣之博采諸書旁及時
俗月為一卷頗考詳治用皇中所上
其云此書今異邦亡佚於本朝存矣其昌平學舍所
藏蓋藤佐也現在書目所載記以系之影古鈔本所
為轉傳者乎

御記書籍

崇禎歴書八百卷本百二十卷本二種あり百二十
卷本は星帯国を脱せ此本を以て善本とす百
卷本は悪本なり
六家文選二名あり一本は行本一本は行本文字
肥大にして一行わかち本善本行本文字瘦小か
る本語字多くして誤脱多
藝文類聚小形本覆刻なり
一本は草辺有界十四行二十八字百卷四十冊
自序并明胡
貫宗序あり
葉氏藜録方　三冊　延平葉大廉撰

淳熙丙午孟冬朔　延平葉大廉書大社令延年
しるす
凡而方書は宋元のその佳作を主とし後の方書
は不可用といへども
大記本草政和本ともに已有新括衍義とかるの
くるし　かゝるに韓ありてよし
体裁かくの如し　和政重修いまいまに括衍義とあ
てまつる　衍義の文を白字にするものはもと
もふ墨字の本なり
橘忠頂後ゆゑに神宮社にとゝまる人著爾仲は

二百卷にして七代実録なりて奇変をきはめ上ハ王
公より下ハ庶民に至るまで塵派四五十卷あり
こゝ迄ハ迷濛なりしに人百歳をかゝるの老寿なる古
高良安ら和漢之少図書る刑仲の図に入りたる
ものなれハ公ハ公にて命あるべけつゝ書しも
此なり古本よりハ何程とも今の本よりハ刑仲
入のものハ彫板よりきものゝ
白石先生ハ〳〵葉の紙い三冊のうのよし四冊
本ハ俗人の加筆せしものゝ
直江板文選ハ覆刻本あるこの本ハ双辺无界行

なりて直江の活字をしこ本ハ双辺有界にして覆刻
ハ元和ふ出来ハなり両品とも小字ら著る活
字書目ふらしく体裁を彼ちハ七賛ちに世流
彫語神ふ釋大典師の授ふ本あるこの本ハ活ふ
晴先明の校合の今彫刻といへる本ハ活字にて
少へふ大典本ハ世上ふ稀ハにして彫板にま
しまてよく見るまゝ〳〵ハ〳〵ちゝ〳〵見分
るハ第十卷先の三点のかしら書ふ高字一字
ハ〳〵とうつて活字にて活本ハ高字のら下ふ数
字ハにて体裁ハかくの如し

五雜組和本ノ天主教ノ話シト孟子ノコトノハ
ナラヌ本アリ是ハ清ノ國忠ナレハ始キシモノニ
古本ノ四庫全書四十二丁乃至五十一丁目ナリ其
文左ノ如シ

國朝西審天竺方慈德那布達蓋玄奘取經之
相傳佛國也其經有三十六藏三千六百餘卷其

書有篆艸楷三法今西洋諸國多用之又有天主
國更在佛國之其人通文理儒雅與中國無別有
利瑪竇者自其國來經佛國而東西年方至廣東
界其教崇奉天主亦猶之孔子釋迦也其書有天
主實義往往與儒教互相資而佛老一切虛無苦
空之說皆深詆之是亦 逃楊之類耳利瑪竇常
言彼佛者竊吾天主之教而以輪迴報應之說以惑
世者也吾教一無處夷只是欲人為善而已善則
登天堂惡則墮地獄永無輪迴亦不須
面壁苦行者人出家日用所行莫非修善也余其

善其說為近於儒而勘世較為親切不敢氏爲以
恍惚支離之語愚駭庸俗也其天主像乃一女身
形狀甚異若古新羅人首竜身者與言恂々有礼
詞弁捷之不渴異域中亦可謂有人也已後竟卒
於京師其徒曰庵由策

又五十二丁月以下孟子註

韃靼之擇獲而敬信佛法乞礼君子得中國冠裳
皆不殺即配以部落婦女見一僧至輒膜拜頂礼
不敢褻慢倭奴亦重儒書信佛法凡中國經書皆
以重價購之独無孟子云有攜其書往者舟輒覆

溺以亦一奇事

婦人良方八分冊

一の善本なりは婦人大全良方二十四巻宋陳自
明撰なるとなりの本は真本なりと見の次ふ後て
八婦人良方補遺大全二十四巻明熊宗立の補技
正なるとなりの本は明薛己の十六種なり
二十四種ふ收むる所婦人良方二十四巻なりこと
まは酒井なる論なるなりなりなりて和板ふ
出来る薛己本は明て亦ふ以上陳自明の婦人大
全良方の韓本なりて中なりも也板ふ云て

らく無くかくのごとくへ

日本後紀ハ和學講談所にて刊行出来しハ
真本なりしもつづうふ十卷なりしハ存ぜざりき
又写本にて全部四十卷ありしものハ偽書なりき
こゝなれかゝりしに再来して漢文二十卷
存ぜる本をあるとも是とても偽書なり二種と
ふ事保の比の人偽作せしものとうけて部人
の説ふ一説見の言は義ふ全部の古鈔
本ハ秘本にて存ぜざる

漢の張良ハ黄石公ふ受しハ世ふ云墨の養ふい
へるも蟻裏鈔ふ引所にハ張良雖ふて下邳
ハ土橋の上ふ遊ひしふ褐衣ふて翁ひしに
逢ふて此橋をとりて當を渡蔭入りしを
翁張良ふ云汝其當にて典へしと云張良石得公
ふ云ひなりふ年老ふ如きて當をもて與
翁やうて云ふて出てきしに出てきて
良謹て敬をなすに好翁ふ云けふて呼て
云く童ハ不相別者ふ云ふ且今吉ふいふ曙
ふうに来つしとて去ふ張良怪奇しふ

て任伯朱倩らに命じて羅紋を彫けて嘆つて云く老子の書を能くして遠く来るハ亦礼なり而吾と延川と洛良又千日爲の師と善しく私定を出て倩ハ又如字を以て諍て云而集し是の酒の酒のなりて老子の大きふ所なりと又吾と云字射の字ハ字東なりと射の字ハ字東なりなりて行師ハ殆くらて羅東を以て如けあるへきなりして一巻の書をなして洛良ハ授けて云是を後ハ王者の師と可成後十一年ふて

り形しに帝師なかる十三年ふ我を海北の穀城山

の麓ふ又へし黄石則我なりんと云て去りぬ不思議ふ思て是を又ふ吉公が兵法の書なり

黄石云ふ素書と云則洛良一巻書と可ふ是なり

或ハ三墨一巻の書と云事あるも素書と正義

と云事ふ又へし

万葉集活字本ニ種あり一本ハ古万葉集とあり

この本ハ誤字多し一両点ふ活字板書ふ

くらし絵義の文ハ誤なり

万暦板の十七史といふものハ宋板なり

定の財記して十一者こふ一史を彫刻せしも

の如くが生存数度の兵革のために板本散亡せ
しが明の世ひろめて所々復所に板あのそこに
そなへ充侍りてあるとも僅に十の二分なり
ていは侍りしかしかいは万層のうち数多くて補
刻せしかてこのうちに宋遼金元の史出来て合
併して二十一史となりて南清の康熙雍正のこ
ろ再び補刻とて年号の紀元きるは案板ありは
そもそもそもそもて汲古閣本十七史は十七史を
新に刻して四朝の史を省略して四朝別史とい
へるもの成侍せしかて又仏簡録といふもの附

しかるに行史二十一は四朝のうちを通鑑の如く
に編年にせしかてそれは真の二十一史といふ
へきものは万層板のみ汲古閣本十七史に別史
あるはいは仏簡録所載へし
康申集は館閣の詩なれども清紀胸の注りあり
しかるに概して清朝のひと詩注は佳なり詩話も
なし

遵生八牋

太世上に流布しかる本三部あるとうへしかるも小ちに

遵生八牋とかうもの八真本ばかりを小ぐふ四字無
之ものハ偽物なりて而も真本斗に自作なりて偽本
二方半位也

おのれ江戸の町ふうとかうとうたは
あき陽田川の辺なる須田ようつてきこして
うりの家ばかりのものにきけたるいま
いまこゝ初めあるとあるとこゝふうと作る
江戸名所市ゐいでゝ種々の書ともひきて
つまり〻ハへなるとやうなりとよいとも
きがいゝ待はるるがこゝもかのくゝの
たゞもゝて何ゝとゝ書つゝて初めつ
の考ゝハなりを我世のけりの初めゝの手つ
たなりをあるけるたまふことかれかゝいふハ

天保十三年の秋の盛のうゑ　あさく
らうつしたる雪は俗の北の窓下ふるなり

八坂本平家物語跋文

寛永三年の春は蔦田検校博要加賀國より
箱崎方検校博一本の雲井の本と奥書ある
平家物語と求め得たり此本則ち千雲井の本
と写す平箱崎方検校博一本と奥去得るゆゑ
蔦田検校博要は本と則して八坂方の平家と
なり

源氏物語ハ吳本ハ得てなきものなりもしこれ
之を佳一ハ流書の板本の書の筆本なりそ
と桂園彩田由亨流ハ人語ふまき

雖然多写あるて八冊の本と其の全本とそ
なる世ふ書く所の刊本（大本四冊 半紙本四）二種あり
共に何れも抄略本なり禁忌の話を落して刊行
したるものと見へたり
世上に行ふ所の元亨集（全部八卷 北畠親房卿著）の写八は
卷ハまつく京都祇園社（七社書数後神書の部不収）
らのを流人の寄入したるものと見へたりなり之写本
にて単行したるもの元亨集八の卷といへる
らの一冊あるとうとハ其の元亨集中八卷の零本
なるを抜きふむ元亨集を刊行のものふハ

卷六あるてあるそれハ何人かハ卷の分を補
いんとて東京祇園社とうつて中八卷とせしも
のとぞんじる
説苑田題名新苑と新苑と題するもの様て
佳本なり
二十一代集のうち何れの集にても写本と異本
ハ抵そうそうしてハ叩くの如きもの
異本なり
体裁のものハ表用ハもくなきものく
宰相保房清書ハ活字版ハ全部ハ出来ぬなり活

玉板ハ出羽ハ信濃の巻ものなり 半紙形之冊
仕ものと用ひ信州ハ信州ハ つばらと云
國初ハ朱江戸ハ信濃の紙ものハ出羽ハ元和寛
永頃 ハ 肥前ハ 肥前の外 石州
豆田石 赤板市谷 石州 と信濃よりハ寛文年中
川牛辺 駒出本所 信州
此集 安房ハ台紙と奉ハ 信濃ハ
ものと信州ハ赤板ハ ものハ信濃
ふて刊行ものなり 寛文五 紙ハ
ものハ ハ寛文年中 この紙者ハ書 近頃市と ハ
ものの信濃ハ信濃ハ

真德寺の翻刻ものハ 法華経 細字七巻 一帖
あて 南宋本の翻刻なり
奉納報恩藏千部 ハ
こ見ハ人丸赤人と 歌の歌仙
ものハ乃ものハ 五本末の歌ものハ連歌俳諧ハ
ものものて此歌の乃ハ仏ものハ 一切の秀歌
乃信男女ハ ハ 歌ものハ 号外連の
菩提寺具成佛の 法華ハ

南無三宝 諸天善神

慶安三 穂 庚 四月廿八日 長頭丸敬白

孔子家語 神祖法寸四冊 浙派共

標題句解孔子家語三卷

双辺有界行 七行十七字

長七寸五分 幅五寸四分強

柔王事紀一卷 已上四冊

双辺有界行 七行十七字

長七寸五分 幅五寸四分半

跋云

世際季運而學校敎將廢也維時

内府家藏云干文干載得其原故興廢継絶

為後學刻梓文字數十万而賜干退而謝

云之恩惠初用家語此書是聖人奥義治世要文寔

非小補也刊字列盤中則明本家語以敎本考正

焉或板行有訛誤或文字有顛倒以它加之以餘

刪之雖如此有帝席鶴鶴誤者必矣只願待博雅

君子改制焉也謹跋

慶長第四龍集己亥仲秋吉辰

前學校三要野祐懐南於伏見里書焉

意賀刊之

七ノ人物志　二分之

新林指掌十二　九十匁之

東華叢求三　四十五匁之

平家物語鈔　三兩二分之

猪山指掌　四十五匁之

万葉名寄　二十五匁之

盛衰記　活字　二兩二分之

本朝医考　二十匁之

日次記事　二兩之

傳通記廿四　三兩二分之

和刑法草案八冊　廿五匁
袁中郎全書　一兩二匁
諸家前右平記十冊　二兩
孝經大全　三兩
元亨釋書便蒙　一兩
本迹雪謗五　四十五匁
紫花布法　六匁
五經新点　三十五匁
枕草紙抄　七十五匁
聯燈録五　三匁

真言教典誌一　廿二匁
碧巖古抄　二匁
辯助天秘決　十二匁
早引二重鏡　日
遺遺恩抄四　二匁　一名貞德家集
六家集類頌　一兩
東國右平記　三匁二分
曽利物語　古板
平家物語　八板本　九十匁
西山文集　五兩

辛酉拾遺 活字 九十匁ノ

拾遺扶桑抄

細新日録 九十匁ノ

皇朝類苑 廿二両三分ノ

北洲文集 古板 九十匁ノ

全 活字 九十匁ノ

群書治要 活字 廿両ノ

花德機集十四 廿五両ノ

楊仲弘集五 廿二匁五分

蘿天錫一 七匁五分

萬葉仙覺抄 廿 三分ノ

世說 大典寺 寺分二朱ノ

貞觀政要 神宗活字 五両ノ

全 町活板 一匁三分ノ

異称日本傳 三匁二分ノ

本朝名臣言行録 七匁五分ノ

五雜組 吉利支丹寺 二分二朱ノ

法華經白相本 八 三分ノ

薄氷和歌集二 十五匁ノ

易林本節用二 日

天文本論語集解　三十五匁之
東涯雜疑錄四　廿五匁之
文句志私記十四
水滸傳解小本一　七匁五分
仝　二篇　大本二　同
小學本注小本二　二集之
擊白集　廿五匁之
正平本論語集解四篇　二分二集之
仝　元跋本四　廿匁之
王注老子國字解　十匁之

感應篇八　廿二匁五分
擊壤集　二匁之
曾丹集　長流自筆本　五匁五ト
本化高祖年譜五　廿五匁之
順德院集　七匁五分
後鳥羽院集　七匁五分
往生要集部書　十五匁之
護園隨筆　七匁五分
新蒙求　四匁五ト
世說抄撮補　八匁五分

安多武久路　壹兩壹分
老子註解　五匁五分
小児方訣　六匁五分
小児方論　八匁五分
傷寒明理論　十五匁
病源候論　二分二為之
開元天宝遺事　三匁
芭蕉句選　四匁五分
和久加世話　十二匁
鶯の白尾　七匁五分

史論寄抄　廿匁
文海披抄　日
古今逸史　十二匁
四書章図大成　一両三分
易書川　一両
本朝學源浪花抄　七匁五ト
異製庭訓　十匁
新撰類聚性象　七匁五分
真言傳　三分
後世徒　日

玉山講義　十二匁ヶ
韓非子翼毳　二両二分ヶ
同　解話　三両二分ヶ
古京古文家集　五匁五ト
経史博論　十匁ヶ
国朝諫諍録　六匁ヶ
宜明暦　七匁五分
万代亀鏡録　七両二分ヶ
俳諧系図　七匁五分
同續山の井　二分ヶ

同法川油う　廿二匁五分
江戸咄　三分ヶ
江戸雀　同
江戸名所記　二分二朱ヶ
江戸古かの子　七匁五ト
万代亀鑑（一名万代亀鏡録）　三両ヶ
擒仙論　七両二分ヶ
秘密儀軌　二通校合　七両二分ヶ
三大部科文
浄土十勝論　三両ヶ

涅槃経會鏡

律三大部 彩板八十冊

唯識本門抄 五十冊 廿兩ヘ

傳通記譯見 廿冊 五兩ヘ

同 再抄 同

河沙婆抄 五十冊 五十兩ヘ

唯識同學抄 二十冊 三兩ヘ

百余尊法 廿冊 三兩ヘ

色音論一名ト 京鏡 二兩ヘ

吉原用文章 壹分ヘ

寛文江戸図 五枚ノ 壹兩二分ヘ

寄ヽ双紙 廿六抄 二兩ヘ

同 活字本 三兩ヘ

禪餘外集 廿二冊 五分

龍龕手鏡 壹兩二分ヘ

義下傳 同

同 かゝノ壹兩ヘ

四月楠 二分二朱ヘ

人倫訓蒙図會 二分二朱ヘ

百人女郎品定メ 七匁五分

好色一代男　廿五匁〆

好色二代男　二匁〆

好色三代男　三匁〆

好色一代女　廿二匁五分〆

水島記　七匁五分〆

大般若経

一　所板六百巻　代正味金廿七両　箱代味噌　荷造代廿貫

一　黄蘗板六百巻　代正味五三十六両　箱代味噌二匁　荷造代廿四匁

一　曽我板六百巻　駄賃四両

一　上野板六百巻　恵日方四十三ノ目斗

一　一切経蘗板六千九百三十巻合冊二千九十四冊扶数二百七十五扶代正味金九十七両五百七十五両備箱代廿個付百五十匁荷造代百十匁駄賃金十七両也

三下